

アトリウム弦楽四重奏団 ショスタコーヴィチ全15曲を1日で完奏

秋島百合子(ロンドン在住ジャーナリスト)



古い城壁や水路が街中に残っている



ヴィッセンブル音楽祭のメイン会場正面

3度目の来日を間近に控えたロシアの新鋭、アトリウム弦楽四重奏団が、9月1日、フランスの小さな町ヴィッセンブルの音楽祭で、日本と同じくショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲を1日で全曲演奏した。「一息でやってしまった方が気持ちを入れ替えなくてすむからやりやすい」と公演の後、メンバーたちは興奮冷めやらぬままに元気いっぱいだった。「作曲家の生涯を辿るには続けてやるのが一番です。特にショスタコーヴィチの場合は自伝的で、1曲1曲に興味深い話が詰まっています。あまり知られていないので、何か説明を加えたらおもしろいのでは？」

チャイコフスキーの3曲も全曲演奏だが、これは日本での公演が最初だという。ロシア人にとって、この2人の作曲家はどのような存在なのか。「ソ連時代の作曲家ではショスタコーヴィチが最も崇拝されています。でも一般の人の好き嫌いは激しい。チャイコフスキーはロマン派の世界では一番、というかロシア随一でしょうね。ソ連が崩壊した時、テレビで3日間『白鳥の湖』をやっていました」。アトリウム弦楽四重奏団はショスタコーヴィチと直接のつながりがある。「第15番を作曲家から直接習って初演したタネイエフ弦楽四重奏団のチェリスト、ヨゼフ・レヴィンソン教授が私たちの先生で、アトリウム弦楽四重奏団を創設しました。ショスタコーヴィチにとってはテンポより音楽を作り出す特性の方が大切だったそうで、テンポは80と書いてあっても90でも70でもいい。それが彼のメトロノームでした」。



約7時間という全曲演奏会の前日夕方着、そのリハーサル後に取材もこなす余裕の態

2015年の創立15周年には、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲16曲の全曲演奏を目指している。メンデルスゾーンも、全6曲の全曲演奏や他の室内楽にも幅を広げて演奏したい。さらにこの年はチャイコフスキーの生誕175年目なので、ベルリンで室内楽のミニ音楽祭をできないかと模索している。



古い街並みが美しいアルザス最北端のドイツ国境の人口8千の町

最後に、プロの弦楽四重奏団がほとんど存在しない日本で、室内楽を目指す若い音楽家へのアドバイスをきいた。

「音楽大学等に室内楽専門の部門をやることです。そこに招く先生は単に個々の楽器の専門家ではなく、四重奏団の一員として長い経験がある人でなければいけません。グループを内側から見ることのできる人が必要です」。「コンクールもあります。優勝するのは知られるためにはよい機会ですが、それからが、ほんとうのキャリアの始まりになるのです」。



アルザスの名物フランベに舌鼓

アトリウム弦楽四重奏団インタビュー記事掲載情報

- ★ぶらあぼ 11月号 (10/18 発行)
- ★音楽の友 11月号 (10/18 発行)
- ★サラサーテ 12月号 (11/2 発行)